
OBに聞く

お話を聞いた人

石井秀昌さん 東京大学2年生

平山雅也さん 千葉工業大学3年生

チームの数だけ答えがある、多様なFLLのおもしろさ

——プログラミングはいつからはじめましたか？

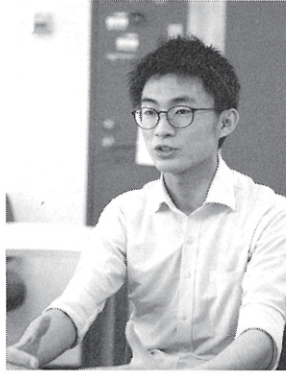
石井 2人とも学校のロボット部がきっかけです。小さい頃から動くものが好きで、平山と2人で2畳くらいのスペースを使って、モーターと電池などを使い鉄道模型をつくるのが毎年の夏休みの自由研究の恒例でした。その流れで自然とロボット部に入りたいと思い、ロボットづくりやプログラミングにも触れるようになりました。

平山 そうですね、プログラミングをやってから「ああこれがプログラミングっていうのか」と気づいたくらいですね（笑）。

——FLLに参加したきっかけはなんでしたか？

平山 小学5年生の夏休みが終わったタイミングで、FLLのロボットを走らせるコートで先輩

右／石井さん
左／平山さん



たちが練習をしていて興味を持ちました。そのあと先生から正式に案内を受けて、参加することになりました。5人全員が同級生のチームでした。

——チームの活動はどんな役割分担で進めていましたか？

平山 部活の方針として、最初はまんべんなくロボットもプログラミングもアタッチメント製作も行います。ぼくもはじめはロボットをつくりたい！という気持ちでいたのですが、まわりの上手な人がどんどんいいロボットをつくる様子を見て「あ、これは勝てない」と思った瞬間がありました。そこでプログラミングを究めようと決め、スキル向上のために、クラブ活動の他にも学園祭や他の大会など、いろんなことに挑戦しましたね。経験を積み重ねていくとできるようになることが増えていき、F1でもプログラミングを中心にがんばりました。

チームは、ざっくりとプログラミング担当とロボット担当に分かれています。ぼくはそのなかでプログラミングを担当してい

ました。メインのロボットの動きは日々仕様が変わります。それに合わせて、さまざまな値を調整することが大変ですが、おもしろいところです。事前にプログラムを調整しておいて、ロボットができたらずぐにプログラムを入れて試走がはじめられるように準備していました。

石井 ぼくはロボットを担当していました。そのなかでも、「ベースマシン」と呼んでいた移動するための部分をつくる役目でした。準備や試走、本番に至るまで何回も走らせても同じ結果が出ないと困るので、緩みが出たり壊れたりしないように細かいところにこだわり工夫していました。多分ぼくの強みは現実的などころなんです。細かいところまでパーツが外れないかどうかものすごく気を遣って……その甲斐あってか、よく、石井のつくるロボットは小さくて丈夫という評判をいただきました（笑）。

そのように、壊れにくいロボットをつくるのが得意だという強みを見つけられたのは、小学5年生からロボットづくりをはじめて3年経った頃でした。この頃になると、ぼくだけではなくチームメンバーのそれぞれの強みが見えてきました。はじめはチーム内で特に分担を決めていなかったのですが、2、3年経って自然と役割分担ができていたと思います。